式辞

南陽高等学校は、今日、27回目の誕生日を迎えました。

さて、先ほど、式典の初めの BGM として流れていたのは、県立高校である本校の生みの親、本県、山形県の県民の歌である『最上川』という歌です。中学校や小学校のときに歌ったことがある人もいるでしょう。創立記念日ですので、この山形県の母なる川「最上川」を歌う県民歌について少しお話をしましょう。

もとは短歌で、日本古来の音数律であることもあり、覚えやすい歌です。皆さんは、先程は何気なく耳にしていたでしょうから、その歌詞をもう一度復唱してみます。

広き野を　ながれゆけども　最上川　うみに入るまで　にごらざりけり

広い平野を　ずっと流れ続けていくけれども

最上川は　海まで流れていっても　その水が濁ることなく澄んだまま流れゆくことだよ

という、内容です。

私は、皆さんと同じ、この山形に育ち、生活している者として、少し誇らしい気持ちで、この歌を聞いたり、口ずさんだりしています。ご存じのとおり、「最上川」は、この置賜地方、本県の内陸部の源流に発し、幾多の支流を集めながら、やがて大きな川となり、ついには、庄内平野にでて、日本海の大海原へと流れ出ます。

それは、まるで、私たちの人生を思い起こさせるようでもあります。最上川の流れは決して穏やかなところばかりではなく、日本三大急流の一つに数えられるほど、流れの激しい場所が多いのが特徴です。人生もまたしかり。人の一生にも、そのような側面があることは紛れもないことです。

それでも、私たちは、様々な苦難を経験しながらも、決してそれに屈することなく、心の清らさや良心を失わず、誠実に生きていこうとしています。

「海に入るまで　濁らざりけり」とあるように、

気高く清らかな精神性を保ち続ける一個の人間として、矜持をもって生活していきたいものです。

さて、皆さんが学んでいる本校の校歌もまた、この最上川水系の支流のひとつであり、南陽市の小滝を源流とし、宮内、赤湯を流れていく「吉野川」の流れのさまから歌いだされます。校歌一番に歌われている吉野川、そして吾妻、飯豊の連峰にきらめく「光の声」は、私たち南陽高校の希望であり、清らかな吉野の流れがとこしえに続く悠久の時間から生まれいづる南陽高校生の一人ひとりの若い命の尊さを象徴的に表現しているように思います。

そして、この南陽高校での学校生活が、常に、私たちを包み込むような希望に満ち、「心豊けく」成長し続ける生徒、そして、高等学校であろうとし続けることもまた、県民の歌同様に、私たちが誇りとすべき精神性であろうと思うところです。

そのような願いを胸に、山形県立南陽高等学校は、旧宮内高校と旧赤湯園芸高校を前身として、平成の時代が産声を上げた直後に、県民の新たな期待を背負って誕生いたしました。平成3年(1991年)のことです。開校記念式典が6月15日に行われたので、この日をもって創立記念日としています。統合前は、宮内高校が5学級、赤湯園芸高校が3学級であったこともあり、普通科6学級、情報経済科2学級の1学年8学級からのスタートでした。少子化の影響で、今でこそ学校規模は縮小されましたが、開校以来27年間、常に、南陽市をはじめとする置賜地区全域から生徒が集う

中核校の一つとして、山形県はもとより、全国各地で活躍する諸先輩を輩出し続けてきました。ご存じのとおり、設立当初から掲げられてきた教育目標は、「自修、自律、自助、和敬」の4つであり、個々の能力を最大限に伸ばすための多様な学びをとおして、総合的な人間力を育て、進取の精神に富み、広い視野に立って行動できる人間の育成を目指し続けています。そして、学習活動はもとより、部活動や特別活動の充実、個々の進路目標の達成においても、幾多の輝かしい成果を挙げ、今日(こんにち)もその校風と良き伝統を継承しながら、日々躍進する南陽高校であり続けているのです。

このように、平成の時代とともに、四半世紀の歳月をかけて滔々とした流れを作ってきた南陽高校でありますが、時代の変化の中で、徐々に流れを変えていく必要もあります。学級数の減もその一つかもしれませんし、社会全体の変容も川の流れに変化を求めるものです。

みなさんご承知のとおり、平成の時代は、来年の4月で幕を閉じ、既に、平成最後の1年間はカウントダウンをはじめています。本校が平成の時代に迎える創立記念式典も今日が最後ということになり、来年の創立記念式典は、新しい元号でその日付を刻むことになるわけです。

裏を返せば、今、私たちは、平成の初めに誕生した南陽高校が迎えた青年期の真っ只中にあり、一つの時代の締めくくりを任されていると同時に、その南陽高校という名の青年の新たな進路選択に立ち会っているようなものなのかもしれません。高校生であるみなさんが、高校時代という大切な人生の分岐点にあり、ここ南陽高校でこれから進むべき進路を築き上げていくのと同じようにです。

いずれにせよ、大切なことは、そのような転換期にある自分自身の課題を明確に認識して、真摯に向き合う高校生活を送ることができるか否かなのです。そのためには、少なくとも、受身の姿勢ではいけません。ときには、「逆白波のたつまでに」激しく厳しい最上川の急流のごとき逆境を経験したり、他者との対立を経験したりすることも、多分に考えられます。しかし、どんなときでも、また、どんな変化が起ころうとも、東北人らしい誠実さと忍耐強さ、そして、常に前向きに挑戦していく気概を堅持しながら、『最上川』に歌われる清らかな心と、校歌に象徴される希望の「光の声」を保ち続けるならば、やがて、諸君は、本校での学びを通じてそれぞれの無二の道を見出し、やがて、社会の大海原へと漕ぎ出していってくれると確信しています。

生徒諸君並びに教職員の皆様と一緒に、創立27周年記念式典を祝うとともに、生徒諸君一人ひとりの充実した高校生活を願い、今日の式辞とします。

平成30年6月15日

山形県立南陽高等学校長　曽 根 伸 之